

## 安息日の意味

申命記5:12～15

ルカ13:10～17

読んだことがある方が多いと思いますが、フランス人作家サン・テグジュペリが書いた有名な小説『星の王子様』の中にこのような場面があります。主人公である星の王子様がある星を訪ねたときでした。そこには呑み助が住んでいて、その呑み助は、空のビンと、酒の一杯入ったビンを、ずらりと前に並べて、だまりこくっていました。王子様はそれを見て言いました。「そこで、なにをしているの？」すると、呑み助はいまにも泣き出しそうな顔をして「酒を飲んでるんだよ」と答えました。「なぜ、酒なんか飲むの」と星の王子様が言うと、「忘れたいからさ」と言いました。「忘れるって、何を」と気の毒になりだして聞くと、「恥ずかしいのを忘れるんだよ」と呑み助は伏し目になってうちあげました。「何が恥ずかしいの」と星の王子様が尋ねると呑み助は言いました。「酒を飲むのが恥ずかしいんだよ」。それを聞いた星の王子様は当惑して、とつてもおかしいなと思いながらそこを去る場面であります。

これは私たち人間の一面をよく表している話ではないかと思えます。悪い、恥ずかしいと思いながらもそれをやり続ける、そのような自分を嘆きながらもやめることができない、自由でありながらも決して自由ではない、何かに縛られている私たちの姿です。

そのように罪の故に、弱さの故に、縛られている私たちをそのサタンの力から解き放つために主イエスはこの世に来られ、十字架の上で死んでくださったのです。主イエスは罪の奴隷になっている私たちを罪の縄目から解いてくださり、病と呪いから解放してくださるために来られたのです。

そのような主イエスの前に一人の婦人が現れました。主イエスは安息日のある日、ある会堂で教えておられました。ユダヤ人の礼拝と宗教の中心地はエルサレム神殿で、ユダヤ人男性ならば、エルサレム神殿で行われる礼拝や宗教的な行事に年何回はかならず参加しなければならない義務がありました。しかし、大抵の安息日には自分が住んでいる村や町の近くに立てられている会堂で礼拝を守り、御言葉や律法を学んでいたのです。主イエスはたびたびそのような会堂で神の国を伝えたり、御言葉を教えたりしておられました。ある安息日も会堂で教えておられました。その会堂の中に十八年も病の霊に取り付かれて、腰が曲がったまま、どうしても伸ばすことができない婦人がいました。

私たちの周囲にも、年老いた方の中に腰が曲がって杖に頼って歩く方もいます。身をかがめて同じ姿勢で長年働いた方や歳を重ねて腰が弱くなった方々がいます。しかし、この女の人は、十八年間も煩った病であったので、その曲がり方はとてもひどいことであったのでしょうか。聖書に出てくるこの婦人がどのような理由でまた、どのような状態であるかについては詳しく分かりませんが、この婦人について聖書は「病の霊に取り付かれて腰が曲がったままどうしても少しも体を伸ばすことができなかった」と書いています。口語訳には全く伸ばすことができないと書かれています。とても酷い姿勢で深刻な状態であるのが考えられます。そのような状態で十八年間を暮しました。この婦人は下だけに目を向けて生きてきたわけです。大抵の病気がそうですが、肉体的な苦痛だけではなく、精神的な苦痛も大きなものであったと思います。当時において治せない病は、神様の呪いや罰のように扱われていたので、さらにその婦人の哀れな姿は、かえって神様の憐れみを受けていない者として、呪われた者として、差別と無視の対象になったことは言うまでもありません。本当に哀れな、悲しい人生であったと言えるでしょう。

しかし、その婦人は安息日に会堂に座っていました。つまり、教会にきていたのです。ユダヤ人の習慣によるものであるか、あるいは痛む心と体をどうか神様に委ね憐れんでもらおうとする信仰的な嘆きがあったのか、彼女はその痛々しい姿勢と人々の冷たい視線があるのにもかかわらず、安息日に会堂にきて礼拝し、神様のことを聞こうとしていたのです。その不便な姿勢は健康を悪くして痩せこけていたのだと思うし、不便なその姿勢は人の目を引くことになり、人々の視線を怯えながら座っていたのかもしれない。

そのような状況の中でした。主イエスはその婦人を見て呼び寄せてこのように言われます。「婦人よ、病気は治った」そして、その婦人に手を置かれました。すると、たちどころに腰が真っ直ぐになり、神を賛美しました。あまりにも不思議で感激的な場面であったのは言うまでもありません。16節で主イエスはその婦人をアブラハムの娘なのに十八年ももの間サタンに縛られていたと言われます。だれも憐れもうともしなかった女の人に、主イエスは「選ばれた民、アブラハムの娘」と呼んでいます。つまり、あなたは尊い存在であると呼んでくださったのです。

腰が真っ直ぐになったその婦人は神様を讃美しました。涙にまみれた、感激と喜びの叫びのような讃美であったのにちがいません。こんなに真っ直ぐな姿勢で顔と顔を合わせて人を見ることができ、顔を上げて主を仰ぎ、讃美することができる、神様の不思議な力を体験した人の讃美です。私は神様の御手によって癒された。神様が私を憐れんでくださった。私は神様に祝された者だ、病と暗闇の力の束縛から解放されたという喜びの告白でした。

私は思います。もし、この婦人が曲がった腰で歩くのがとても辛くてその日は礼拝を休もうとしたら、またこのようなカッコで人々が集まる所に行くのはもういやだとしてその日教会に来なかったとしたらどうなったかと。この婦人は自ら主イエスに癒しを求めたものではありません。礼拝を守るために教会(会堂)にきていたのです。婦人はたぶん顔を上げることもできず、ただ下に目を向けて座っていたことでしょう。そのような婦人を主イエスが御覧になりました。主イエスの方から先に見ておられたのです。そして、癒してくださいました。口ではいえないけど胸に詰まったその婦人の嘆きとため息を主イエスは御覧になったのです。そして、神様の形として造られた尊い存在である神の娘が心も体もサタンに縛られ、痛んでいるのを憐れんでくださったのです。人々から捨てられたその哀れな女の人を顧み、その根本的な問題に手をおいてくださったのです。皆が拍手をしたくなる心が動かされる場面です。

そのような感激の出来事が起こったのにもかかわらず、それを見た会堂長はイエスが安息日に病人を癒されたことに腹を立て、群衆を煽動するつもりで、群衆に向かって言います。「働く日は六日ある。その間にきて治してもらおうがよい。安息日はいけない」。当時の宗教指導者たちは安息日遵守のための数々の目録を作り、それを厳しく守るよう教えました。安息日には重い物を持ち上げてもいけない、規定された距離以上を歩いてはいけない、そして、一切の労働を禁止することも入っているのです。その規定を主イエスが破ったわけです。それに憤りを感じました。その不思議で感激に溢れる場面を前にしても彼らの心は動かされることなく、律法を守らなかったことに対する厳しい判断基準だけに捕らわれていたのです。彼らこそ縛られている人間でした。自分自身の宗教的な価値観、自己中心的な信仰が絶対的に正しいのです。神の子イエスよりも自分自身の思いが大事なのです。主イエスの憐れみを拒否する頑なな心になっているので、腰が曲がった婦人よりも心が曲がっていて深刻な状態です。それで、主イエスは叱ります。「偽善者たちよ、あなたたちはだれでも、安息日にも牛やロバを飼い葉桶から解いて、水を飲ませに引いていくではないか。安息日であってアブラハムの娘、選択された神様の民であるこの人をその束縛からといてやるべきではないか」。牛やロバに毎日水を飲ませるということは命に関わることです。ですから安息日であっても許されていたのです。この婦人は十八年も曲がった腰をして生きてきました。ある面一日伸ばされるとしても大きな問題ではありません。それで死ぬことはないのです。

では、なぜ主イエスは安息日にこのような行いをなされたのでしょうか。そして、主イエスのその言葉の意味は何でしょうか。

ここで主イエスは縛られているのを解いてやるべきではなかったのかという表現をしています。束縛から解き放つということです。つまり、ユダヤ人の律法に、綱などで縛られている動物を安息日に水を飲ませるために解き放つことが許されるのであれば、獣ではなく自由な存在として生まれたアブラハムの娘であり、十八年間も縛られていたこの女の人が、安息日であっても一刻も早くサタンの束縛から解かれることは許されるべきではないか、本当に直されなければならない者はあなたたちだ、と主イエスは言われたことではないでしょうか。律法や宗教的な規定が優先ではない、それは何のためにあるものか、神様の御心がどこにあるのかを、知りなさいということなのです。人に対する憐れみと愛を失い、律法だ

けを優先にして心が固くなっている人たちに主イエスは偽善者たちよ、と辛辣な非難をしておられながら、この婦人の癒しを通して、安息日の真の意味を教えようとなさったのです。

安息日、つまりわたしたちにとっては主の日になるわけですが、あるいは、聖別されたという意味として聖日とも言いますが、主が復活なさった日です。つまり、主イエスが死の束縛から解放されたように、私たちが縛っているもの、死と罪の呪いから解放された日です。罪と悪によって縛られて、そのゆえに少しも伸ばすことが出来ないほど固くなってしまっている心と体が解かされ、癒される日なのです。解放と自由の日です。イスラエルの民のように奴隷の状態から解放され、自由の身になったことを喜び、神様の御業を祝う日なのです。

主の憐れみを知るわたしたちは、腰の曲がった婦人の苦痛が私の傷みになり、その癒しをともに喜ぶ日なのです。死と暗闇の力に打ち勝つ日です。すべてのことから解放され、癒される祝福の日です。私たちは神様の選ばれたものです。主イエスの十字架の血潮によって救われたものです。その尊い私たちを、だれも、どのような力も縛ることができません。私たちの罪、弱さ、すべての問題を主の御前において、解放された恵みを共に喜び祝いましょう。わたしたちを憐れみ、助けてくださる主のみ手が常に私たちの上にあります。それを確信し、主に感謝し、主に従う心を新たにすることが私たちの安息日、主の日です。安息日は今も主が働いてくださる日、その御業を喜び、祝う日なのです。